

中国天台における『円覚経』

岩 城 英 規

『円覚経』は中国の唐代に作成された偽経であり、宗密が終生を傾けて注釈を著して以来、その後の中国仏教の方向を決定することになった起信論に替わる極めて重要な經典である。また宗密が取り上げてから、華嚴・天台・禪を問わず、宋代以降広く注釈書が著された。本論文はこのような状況を踏まえ、天台系注釈書の特徴を見るときにも、経や宗密の注釈書との注釈傾向の違いを比較対照し、それぞれの特徴を簡潔にまとめることを目的としたものである。

—『円覚』という概念に対する経・略疏(宗密)・集註・心鏡間の解釈の相違—

『円覚経』はその名の通り、『円覚』について説く經典であり、『円覚』がこの經典の中心を為す概念となっている。ということとは『円覚』はいふ語に対する解釈を比較検討することにより經典及び各注釈書の特徴を把握することができると考えられる。よって今から各注釈書における『円覚』の解釈を検討することにする。

—経における『円覚』の用法—

経における『円覚』の用例は総計63個所であり、このうち菩薩の名前としての『円覚』(円覚菩薩)を除くと58個所となる。これらを検討すると経では「修行者が到達すべき最高の境地」という意味で用いられており、これが原義になり、これから派生したものとして、この境地を普遍・抽象化し個別のものとして取り扱うようになった「性」としての意味や「最高の境地に至るための究極の教え」といった意味で用いられていると考えられる。

—宗密の略疏における『円覚』の解釈—

次に宗密における『円覚』の解釈について見ることにする。宗密には円覚経の注釈書として略疏・略疏鈔・大疏・大疏鈔の四種類があるが、後に述べる円覚経集註が略疏を基本にしていることから、ここでは略疏における『円覚』の解釈を中心にすることにする。『円覚』の解釈部分については経の『円覚』の部分に関するものと、その他の部分の説明があ

るが、どちらにも経とは異なる独自の解釈が見られる。すなわち経において『円覚』は「最高の境地」という意味で用いられたが、宗密においては「最高の境地」に達する主体としての修行者という観点が重視され、さらに厳密に言えば「最高の境地」が起こり得る場とは修行者の心であることから、『円覚』を「修行者の心が到達し得る最高の境地」という意味で捉え、これから進んで「最高の境地に到達した心」という意味にまで解釈が心に引きつけられてくる。思うにこれは宗密自身が教禅一致を主張した禅の実践者であり、円覚経を自らの体験を基にして解釈した結果だろうと考えられる。

―円覚経集註における『円覚』の解釈―

天台系の注釈書の一つである集註の解釈を見てみよう。集註は宗密の略疏を基本に天台の諸師の注釈書を会合して著されたものである。前述の宗密の略疏では『円覚』を修行者の一心に約して解釈する傾向が見られたが、集註ではこの方向は是正され、最高の境地を普遍・抽象化した「性」としてのものとして解釈している。たとえば「一切法唯心体具全心発生互取即遮即照離性離相皆真皆如心仏衆生三無差別是則塵勞妄想即大円覚」（五左上）「円満覚性三諦具足『自性』中也『非性』空也『性有』仮也『有』是具義」（二二右上）、「妙円覚体徳量遍融心仏衆生三無差別」（二六左上・下）、「妙円覚契中道也」（二八右上）などである。性としての解釈という点

では経本来の立場に戻ったと言うことができる。ではその「性」としての円覚の内容であるが、ここでは天台系の注釈書らしく唯心体具・三諦具足といった諸法を性具するものと規定される。『妙円覚心』の解釈では「本周法界唯心唯色非外非中互具互取誰依誰正迷情強隔復本一如」（一三左下・一四右上）と説明され原則的には色心等分主義に立っているが、起信論思想の影響により、本来の天台思想が改変された面も見られる。たとえば「無明本来自性空寂、非由今日滅破方無、智者云陰入皆如無苦可捨塵勞本清淨無集可斷、以性奪修諸行無作」（郭南）（七右上・下）がそれで清淨真如を基本とする思想に方向が修正されている。また首楞嚴經の経体とされる「常住真心性淨明体」が用いられるなど心を一切の根本に置く思想の影響が部分的に見られる。

―円覚経心境における『円覚』の解釈―

天台系のもう一つの注釈書である心鏡の解釈について見ると、集註と比べて心鏡はその名が示す通り心に約して解釈する傾向が強い。『円覚』に対する解釈を見ると、諸法を性具するものとしての天台思想に基づいた説明と清淨空如・不變隨縁としての起信論思想に基づいた説明の両方が為されている。たとえば前者としては「大円覚性廓十方法界互隔出生無尽自行則淨穢亡泯無不空中化他則帝網交羅三千皆仮故曰究竟円満遍十方即如上十界也」（四七九左下）、「若大乘菩薩

修円頓行以性奪修名無作行皆是性惡法門直指華嚴生死涅槃本如來藏即大円覚」(四九一左上)下、「今修円覚用以中道仏性諸法実相如如之理為觀境」(五一七右下)左)などがあり、後者としては「以由円覚無自性故遇染則情生十界俱染在理則性淨十界俱淨」(四七六左下)「円覚随縁作一切法在身則全覚性為四大」(四八六左下)などがある。さらに心鏡において特徴的なことは『円覚』の持つ性質としてこの両者を並立している点である。たとえば「円覚如美玉瑕不能染円覚清淨穢不能入円覚真実虚妄不入、又須知円性即三千具徳之性亦包蔵一切善惡」(四九三右上)下)がそれである。この円覚の二面性の並立という問題は華嚴経を引用しての解釈にも見られ、「復将所顯三千妙法一一歴於色心依正衆生諸仏百千三昧無量行門一一無非円覚妙心如是則一切衆生皆毗盧体一切国土悉寂常光心仏衆仏三無差別」(四八七右上)下)と「円覚即仏也、帰已識心反觀諸法唯心所造、今之歷法要顯心具具無別具尽是縁生生無別生尽是心具、心性心具法法清淨故云『顯心清淨』華嚴云三界無別法唯是一心作」(四八七右下)とがそれぞれである。前者を「心仏衆生三無差別」で解釈し、後者には「三界無別法唯是一心作」を配して説明しているが、本来統合されることのないこの両者をともに用いて説明しているところに注釈者の問題意識を垣間見ることができると思われる。またこの問題に関連して、心鏡では色心等分主義に原則的には立

ちながらも、前述の「唯是一心作」を引用した心具的な解釈や集註と同じく首楞嚴経を用いた円覚の解釈、「円覚妙心性不自守随縁作種種名一常住真心、性淨明体、空如来藏、涅槃妙心、諸法実相、王三昧、真如、法界、第一義諦、無生妙理」(五二四右上)左)や、首楞嚴経の解釈で引用した山外派の孤山智円の著作の部分、「孤山云、楞嚴阿難雖請於止以即一而三故止觀亦即平等三一互融是以妙以称由妙方曰楞嚴大定也」(五〇四左下)五〇五右下)など、心情的には唯心主義に共感する傾向が見られる。

— おわりに —

以上をまとめると、集註・心鏡の両者とも天台思想に基づく解釈を行っているが、起信論・楞嚴経による唯心思想の影響が見られ、この両者が統合されないまま水と油の如く並立していることがわかり、また心鏡の方が集註よりも唯心思想への共感が強く見られるという特徴があげられる。これらはこの時代における天台系の諸師の思想傾向を反映したものと見られ、彼らの禅に対する共感と反発といった苦悩が看取されるところと考えられる。

△キーワード▽ 円覚、唯心体具、清淨真如

(東京大学大学院)